

# 女性報道写真家として生きる

大石 芳野

報道写真家

○司会 皆さん、こんにちは。定刻の2時となりましたので始めさせていただきます。本日はこのようなあいにくのお天気なのですが、皆様お越しくささいましてどうもありがとうございます。第1回目の講演に先立ちまして少し注意点を申し上げたいと思いますが、まず携帯電話なんですけれども、必ず電源のほうはオフにしてお願いいたします。それと、講演中の私語はないようにお願いします。最後に質疑応答等がありますので、そのときにご質問がありましたら幾つか承りますので、そちらでよろしくをお願いいたします。

最後に、皆様に受付でくじをお渡ししたと思うんですけれども、講演の最後に抽せん会を行います。それで、こちらに置いております大石先生の写真集なんですけど、10冊ほどプレゼントいたしますので、どうぞ最後までお楽しみください。当たらなかった方も、先生のほうから1冊写真集を持ってきてくださっているんで、1冊分は購入が可能です。よろしく申し上げます。サインはその分はもちろんしていただけます。こちらにも1冊にはサインが入っております。

では、所長のほうから、挨拶と講師の紹介をさせていただきます。

○清田 どうもこんにちは。本当に寒いところをありがとうございます。

テーマが日本女性の自立を考える、自立というか、皆さん自立していらっしゃるわけですけれども、社会進出が多少、世界標準から比べると何を物差しにするかですけれども、少し日本は先進国としてはまだまだなのかなと、こういう状況です。さっきも考えたんですが、日本女性の社会進出を考えるというほうがテーマとしては適切だったのかなというふうに思ったりもします。

きょうはこのテーマということもあるのかもしれませんが、ふだんよりも女性の方が圧倒的に多いという感じがいたします。男性の方も本当にお越しいただいてありがとうございます。女性の自立、社会進出を考えるということは、女性も含めて、男も女も老いも若きも、暮らしやすい、生きやすい世の中をつくるということですので、基本はそうしたいい社会づくりに向けてということなんだろうと思います。

大石芳野さんでいらっしゃいますけれども、皆さんに、大変失礼だったんですけど、1点目は短くまとまっておりましたので、大石さんのプログラムがここに出ていると思います。受賞歴にありますように、1982年に岩波書店から前年に出されました「無告の民 カンボジアの証言」という作品で写真協会の年度賞をお受けになって、1994年に芸術選奨の新人賞を受けていらっしゃいます。そして2001年、これは前年に講談社から出た「ベトナム 凜と」、これはベトナムの戦

後20年を切り取られたフォトとエッセーですね、フォトエッセー、これが土門拳賞、土門拳賞というのはプロの写真家の中で最も権威のある賞で、私も大好きな報道写真家ですけども、それから2007年に紫綬褒章、それから最近では原発の後の福島に通われたお仕事で「福島 FUKUSHIMA 土と生きる」というものがこれが最新の著作物であります。写真集はそのほかに下にずっと出ております。たくさんの写真、そしてそれとエッセーで構成されているというのが多いんですけども、皆さんにお配りすればよかったんですが、1つだけご紹介、大石さんの生きざま、生き方、人となりを紹介した文がありまして、それを紹介させていただきたかったんですが。

皆さん、鶴見和子さん、もう8年前ですかね、お亡くなりになりましたけど、戦後の日本を代表する社会学者で上智大学の先生をなさっていましたが、柳田國男とか南方熊楠の研究で有名な方ですが、彼女と、鶴見さんと大石さんは、共著、一緒に書かれた対談集もあるんですけども、その鶴見さんの文章がここにあります。大石さんが土門拳賞受賞されたときに鶴見さんが短歌、歌を詠まれているんですね。ご紹介しますと「ベトナムの子らの瞳凛と撮した大石芳野の瞳は凛凛と」、こういうことですね。今も久しぶりに大石さんとお話する機会があったんですが、相変わらず背筋がびんと伸びていらして、今の日本社会の現状に対して非常に鋭いご意見を語っていただきました。相変わらず凛としていらっしゃるなという印象を受けました。それに続いて、鶴見さんが大石さんのことを紹介した文章があります。ちょっと長いんですが読ませていただきます。戦場の写真を撮っている内外の男の写真家は多いが、女のカメラマンで戦場の写真を撮っている人は少ない。大石芳野さんはその数少ない女の写真家の一人である。男のカメラマンの多くは戦場の写真でのワンシーンを切り取ることが多いようだ。しかし、大石さんの特徴は次の三点に集中していると私は考えている。第一は、戦争による女と子どもの運命に焦点を当てていることである。第二は、レンズを通して自分の眼と、相手の女や子どもの眼とをきっちりとかい合わせて、眼を通して相手の心のあり方を深く探り当てていることである。毅然として侵略者とたたかい、苦境を乗り越えた自信に充ちですね、未来への希望を担うベトナムの子らと、破れた家の窓から不安そうに外をのぞくコソボですね、ユーゴのコソボの子ら、そして打ちひしがれたアフガンの子らの眼は、それぞれ対照的に写し出されている。第三は、おなじ場所に何回も立ち戻って、戦争による女や子どもらへの影響を個人史をとおして適時的にたどっていることである。適時的というのは時を逃さずということだと思いますけれども、たどっていることである。以上のような特徴をもって、大石芳野さんの写真は、よりリアルに、感動的に、戦争による女と子どもらの運命とその魂のあり方を写し出しているという文章です。まさに大石さんの生きざま、仕事ぶりを象徴するような文章だと思ってご紹介さしあげました。

じゃ大石さんをご紹介いたします。(拍手)

○大石 皆様、こんにちは。よろしくお願ひします。今風邪がはやっていますようです。私もちょっと喉がおかしいので、途中で詰まったらごめんなさい。きょうは1時間半余りお話しさせていただいた後で質疑応答ということになっていますので、私の話の中でちょっとわかりにくいと

ころとか、話しながらちょっと足りなかった部分などをメモしておいて後でどうぞ質問をしてください。

きょうは女性の、ちょっと待ってください、そうそう、女性報道写真家として生きるというタイトルなんですね。報道写真家であるんですけども、写真という道を歩き始めたのはもう四十何年も前で、写真に携わって約半世紀近く長い歳月を歩いてきていますが、ここにいらっしゃる方々と私はほぼ同年齢なので言わずもがなですが、昔はもう女性が女性らしくない仕事をする、かなり足を引っ張られたり頭をたたかれたり、いろいろありました。今は女性がとても多いですね。むしろ女性のほうが元気があって賞をとる方も女性が多いような状況がここ数年続いていますので、様子はだいぶ変わってきましたが、私が駆け出しのころというのは写真を撮るのは男性、撮られるのは女性と決まってきました。だから、私が撮ろうとすると非常に奇異な目で見られたというのが一般的でしたね。もちろんそうでない私の先輩たちもいたと思いますけれども、そうした状況の中で写真を続けようと思った理由は幾つかあります。その一つは、私が学生時代、つまりベトナム戦争が激しかったころのベトナムに行ったことが大きいですね。当時、北ベトナムと南ベトナムとで戦争をしてまして、南ベトナムにアメリカ軍が加担して、お手伝いということで南ベトナムに軍を送って、一番ひどくなって延べ人数50万人ぐらゐの軍隊が小さな南ベトナムに駐留して大変なことでした。日本でもベトナム反対、反戦運動がかなり全国的に起こったりしました。実は64年にトンキン湾事件というそういうでっち上げの事件がありました。そして、トンキン湾事件によって、北ベトナムに空爆を公然と開始したというのが65年ですね。

65年になって戦争がどんどんどんどんひどくなっていて、ベトコンと言われる要するに反アメリカ軍ですね、ベトナム・コミュニストという意味でベトコンとなったんですけども、そのベトコン少年が公開銃殺されることがありました。それが65年で、朝日新聞の当時、秋元さんという写真部のカメラ記者が衝撃的な写真を撮って発表されたのを私は非常に印象深く思っています。その翌年に、私は8人の学生の一人として、いくつかの大学の学生と一緒にベトナムに行きました。ベトナムとの交流として、ベトナムから学生を招いて日本でいろいろ話をしてもらい、それからまた私たちがベトナムに行くという交流を何回かしました。その最初に私も行きました。日本では、いろんな人がもう戦争なんていうのは日常化して大したことないよとアドバイスする人もいました。いや、とんでもない、あそこへ行ったら危険だから行かないほうがいいよという人もいました。でも行きました。今は成田空港、こっちは関空ですけど、ではなくて、羽田空港から当時は香港に出て、香港からサイゴン、今のホーチミン市ですけど、行きました。そこに着いた途端に、空港、タンソニャット空港と言って、今でも同じ名前です。その空港に着いて窓から見た光景は、日本では見られない軍用機が空港の中に何機も止まっていて、降下して滑走している、自分が乗った飛行機の窓から見たものは、まずそこに戦争というのがすごい勢いで私の目の前を過ぎていくというのが最初の戦争、ベトナムの戦争でした。今は空港が近代化して、そのまま真っすぐ建物の中へ進みますが、当時は一度タラップから外に出ますね。外へ出て私の

目に見えたものは、サイゴン兵か、兵隊の遺体とか怪我人が担架で運ばれていく姿でした。

これは、私は、戦争というのは記憶の中に日本の戦闘もなかったものですからかなりショックを受けてまして、戦争ってこういうことなんだとまず思いました。それから、街に出ました。街はまだ当時はサイゴンは戦場になっていなくて、とても静かでした。私の知人が言った戦争なんてないよというのが、うん、そうかもしれないって思うぐらい何もありませんでした。でもサイゴンの街の中を歩くと人びとの目がかなり緊張してることに気がつきました。その当時の日本の子どもたちというのは、今は余り見かけないいわゆる子どもらしい子どもの表情を持っていたんですね。ところがベトナムの子どもたちというのは子どもの目を全くしてないんですね。これは見て本当に驚きました。子どもがどうしてこんなふうな目になってしまうんだということ、まず思いました。そして、街の中を歩く。静かです。日常の騒音はありますけれども、地べたに座って物を売っているおばさんとか、今でもいますけど、かごをしょって農作物を売り歩くおじさんとかおばさんとか、そういう人たちがいました。でも目が違うんですよね、みんなとても緊張している目に私には見えませんでした。そういう姿を見ながら、ああ、これが戦争なんだということをそこで本当に強く感じました。弾が飛び交ってくるその場所、砲弾にやられたということも戦争ですけど、それだけでなく、一見静かに見えるけれども実はみんな非常に緊張し切っているということのその意味を私は、多感な年齢でしたので、刺激的に感じました。

それが私の最初のベトナムの印象で、翻って私の戦争というのは何かといえば、アメリカ兵がちょっとお化粧してきれいにした女性を連れて街の中を歩いているという戦争、それから傷病兵が白い着物を着て、アコーディオンなどをひいて街角に立ったり、電車の中で帽子を回して歩いてきたりというのが私の戦争、日本の戦争の記憶なんですね。でもそれをはるかに超えたものがベトナムというところにあったということなのです。

日本はそのころ、1960年に池田内閣の所得倍増計画が出て、田舎を捨てて皆さん都会へ出ましよう、工場労働者になりましよう、田んぼや畑を捨ててまちで働きましようというキャンペーンが盛んに行われていたあたりですから、高度成長の真っ盛りが加速されているところで、日本の夜もどんどん明るくなっていったということですよ。そういう日本というものをベトナムで自分の子ども時代から振り返って考えて、どうしてここは、日本が復興するというか成長するというか、そういう暮らしがよくなっていくのに反比例するように、ベトナムの人たちは苦しい生活を命を奪われるような暮らしをしなければならないんだらうかということにとっても悩みました。向こうの学生との交流が目的でしたので、学生と交流しながら、意見をききました。学生は恵まれているんです、戦争に行かなくてもいい人が多い。いいところの子どもたちが多いわけですから。けれども自分の身分証明書の、身分証明書の番号というのがあるんですけど、それが張り出されると男の子は戦場に行かなければならないという、切実に学生たちは訴えてました。学校から外へ出ると一般の若者が兵隊として出ていく、とられていくというそういう日々の中で苦しんでいるという姿を見て、とにかく若い人たちがあしたがないんですよ。あしたは戦争で殺すか殺さ

れるかなんです。それが戦争なんだということ、これは大阪も大空襲を経験なさった方たちは子どもながらによく覚えていらっしゃるかもしれないですけども、私はそういう経験をしなかったので非常に痛烈に感じました。

私がもうベトナムを去るころに、余りにもいろんなものを見過ぎてしまって、私はどうしていいんだろうと気になりました。何かベトナムで私の力を役立つと思ったらおかしいけど、今ではボランティアとかってありますけれども、そういう何か私で役立つものはないだろうかと思っただけで真剣に思ったのです。学生たちと話してたときに、私で手伝えることはないだろうかと言葉にしました。すると学生はこう言ったのです。「その気持ちはすごくうれしい、でもあなたの国は平和だ、僕たちの国のことは自分たちにまかせてくれ、自分たちのことは自分たちです」と。今はいろんな国にボランティアがあって、お手伝いという言葉は十分に行き渡ってあるんですけども、私はそのときにすごく頭を殴られたような気がしました。なぜならベトナム戦争というのは、そもそもアメリカがお手伝いするよということで南へ軍隊を派遣したのですよね。あれ、お手伝い戦争ですよね、むしろ共産主義の拡大をベトナムで食い止めるという大義があつたことですが。ということにその瞬間気がついたわけです。私は何てばかなんだろうと、物すごく自分が恥づかしかったし情けなかったです。で、私は本当に言葉もなく、何か言ったかもしれないけれども、うなずきながら自分で自分の心に約束しました。わかった、とにかく私がやめようと思うまで私は写真をやり続けよう、自分がやめたと思うだけの大事な理由があつたらやめる。でもせっかく写真という道に自分が進み始めたんだから、とにかく最後までやり続けるということにしようってそのとき思ったわけです。というのは、私は日大芸術学部写真学科の学生でしたが、自分に写真が向いてないんじゃないかとか、どうせ人生を送るんであれば何かもっと別なものが自分に向いてるんじゃないかとか、そんなことを考えてちよつとろろろろろろした感じを持ってたんですね。でも写真の道を歩もうと思って歩み始めてるのに、随分自分はだらしがないなということを思ったのです。写真をやろうと自分が志した以上は、何があつても、自分がこうこうこういう理由でやめたと思うまでやり続けようとそのとき自分に誓ったわけですね。というのが私が写真をやり続けてる理由です。

なぜこの話をしたかという、要するに私が社会人になって、最初に申し上げたように、女のくせにとか、何かという女がつくわけですね。女だからできたんだとか、よくても悪くても必ず女がつく時代だったのです。もう本当にやめたかったです。何で私はこんないじめられたり嫌な思いをしながら写真をやり続けなきゃいけないんだろう。私はそこまで不快な思いをしなかったっていいんじゃないのと自分を大切に思ったりしてたんですけども、でもそのときに思い出すのがいつも、私は自分に誓ったんだよね、あのとき絶対にどんなことがあつてもよっぽどことがない限りやめないって約束したんだよね、自分に、と思いました。女のくせにとか、女だからとか、女なのとか、いろんな中で実は就職もできなかったのです。大学出るとき、カメラマンとか写真家とか、そういうので採ってくれるところがなかったんですね。仕方がな

いのでフリーランサーになりました。ところが社会はフリーランサーに大変厳しくて、本当にそういういろんな言葉は降ってきましたけれども、仕事はめったに降ってこなくて苦労ばかり。それは何も写真家だけではなくて、当時の女性たちが味わった苦い体験なんだろうと思います。

そういうことを乗り越えてというか、ひたすら私はやるんだ、私は約束を破らないんだというだけで何年かずっと来たんですけれども、途中で、今度生まれたら何になりたいかってよく私たち話しますよね。そういうときに1つだけなりたくないものがある、それは写真家だとずっと思っていました。50歳を過ぎててもまだ思っていました。けれども、もうあの世が近くなってくると、これまでの人生の残りはその分ないわけですから、そうなってくると、もう一度生まれても写真家でいいかなというように最近やっとなってきたなと思っています。それはなぜかという、この世界になれたということではなくて、テレビというのが非常ににぎやかになって最先端になって、今でもテレビのインパクトって新聞よりも強いんですね。だから、テレビで報道されると、新聞で報道されるよりも、テレビ見ましたよとなる。ムービーという動く映像というのもとても魅力的で、取材しながら、これがムービーだったらどんなにいいだろうと思うことが何百回あったかわからないんですけど、なぜかといえば動きが出る、音もとれる。においては伝わってこないけど、ほかは何でも伝わります。それはすばらしいと私は今でも思ってます。

もう一度写真でもいいなと思っている最大の理由は、今の話に反するのですが、写真というのは動かないということなんですね。音もない、動かない。何も無い、ただそこにとまった絵があるだけ。これは撮る写真家にとっても力量が必要です。それを切りとるということにおいて。でも見る人にも実は力量が必要だというふうに私、思ってるんですね。これを見るにはどうするかといえば、見る人の想像力で見るしかないんですよ。テレビももちろんそういう部分もありますけれども、やっぱり写真は動かない。だから、見る人がそこに自分を置いて重ねて、そして想像力を持って写っているものと対話しながら見る、あるいは見続ける。何十分でも見続けることができるという。これってほかにはないなと思います。それで、前からそれは思ってたんですが、人生もこの年になってくると、これがやっぱり私の天職だったのかもしれないと思えるようにしたいというか、なりたいというか。

ということで、私は今日まで来てますがそうした話題はたくさんありますが、きょうはスライドを持ってきましたので、この辺りで中断して写真の上映に入りたいと思います。スライドを見ていただくのは、まずアジアです。なぜアジアかという、日本はアジアだということですね。日本の文化は日本の中で生まれたものもあるけれども、大体がアジアのどこかの国から、あるいは民族と一緒に入ってきたもの、あるいは送られてきたものが日本流に発展して熟成して、そして日本の文化になったと思います。そう感じたのは、やはり現地に行っているいろいろな文化に接して、そして、何これ、日本のものかと思ったらこっちのものだったのというような驚きがたくさんありました。日本人はアジア人だということをつい忘れて、自分はアメリカ人か白人かと思ってるような人も中にはいるんですけれども、日本はアジア人なわけですね。だからそういうこと

を認識する、あるいはしてもらう意味でも、アジアというのは大事だと思っています。けれども、1960年代、70年代は、私がアジアにせっせと通うと、大石さん、あなたはどのようにしてそんなに汚くて貧しいところへ行くんですかと、こう言われたんです。私はその都度声を大にして、とんでもない、違います。あんなにすてきなところありませんと言ってきましたけれども、今はそれが認められて、アジアもすてきなところだと多くの人が思うようになって、私は本当にアジアから卒業したいぐらい安心してらんです。あのころはもう一生懸命こんなにすてきな文化があるんですよ、こんなにすてきな笑顔があるんですよ、こんなふうにしてみんなが日々家族を大事にして過ごしてるんですよといった当たり前のことを言うことで何年も過ぎてしまったほどです。日本人もアジア人なんだということを認識してもらいたいという思いで、私はフォトジャーナリストですから写真で伝えたくて、一生懸命、ついむきになったりしたりしましたけれども、そういうことでアジアと長い年月つき合ってきました。

アジアといっても実は多様で、東南アジアといっても多様で、民族は100以上ありますから本当に言葉も違うし、山一つ越えれば文化も違う。顔立ちといいましょうかね、表情ではなく顔もちょっと違うという感じなんです。端的に言えばベトナムとカンボジアって国境を接してるから、ベトナムもカンボジアも同じような顔をしてる人がいると思うかもしれませんが、ベトナムというのは私たちと似てる、似てるといっても日本人って千差万別ですから一概には言えないけど、どっちかという中国系なんです。カンボジアというとクメール民族が主ですけども、クメール人というのはどちらかという海を渡った南方系の、マレー系。クメール系がどこの民族かというのは、まだ歴史的にも学問的にもよくわかってないんですが、マレー系に属するのではないかという説もあるぐらい、肌がちょっと濃くて目が大きくて、鼻は少し幅広くて背が高いという民族が多いです。今、混血してさまざまですけど。国境を接して、この線から向こうはベトナム、この線からこっちはカンボジアではあるけれど、民族は全然違う。これはみんなインドシナと簡単に呼んでいますが、実はインドというのはマレーシアも含めたカンボジアなどはインド系の文化圏。シナというのはチャイナですね、中国系ということで、インドと中国の文化を持った国々の人たちの地ということでインドシナ、インドチャイナという言い方になって、ベトナム、ラオス、カンボジアにタイとマレーシアを入れて、インドチャイナ文化圏は5カ国と一般的には呼ばれています。その中でもまた少数民族がいて、またさらに、さまざまになっていますけれども、そんなことで本当に深く一筋縄ではいかない、幾ら取材しても取材しても足りないという所なんです。

ところで、その中で最悪なのがベトナム戦争です。ベトナム戦争は75年の4月30日までということになっていますけど、始まったのはいつかというのはこれは諸説ありまして、1960年に南の地域にメコンデルタのモカイ郡という所があるのですが、そこで南ベトナム解放戦線が蜂起したのを機にベトナム戦争が始まったという学者もいますし、1954年にディエンビエンフーでフランスが負けて退去して、17度線が結果的に引かれてしまって北と南に分断されました。その1954

年からベトナム戦争が始まったという説もあります。

ともかく第一次インドシナ戦争がフランスからの独立のための戦争、第二次インドシナ戦争がアメリカとの戦争というふうに大ざっぱに分かれています。そのインドシナ戦争の中にカンボジア戦争も入ります。カンボジア戦争は1970年から75年まで。実はここまでは大体みんな承知しておられることだと思うんですけど、その後実はベトナムは政治的にいろいろなことがありましたし、中国との戦争もありましたけれども、とりあえず平和の方向に歩き出しました。ところがカンボジアは75年から、ポル・ポト時代になりました。ポル・ポト政権というのが正式には民主カンプチアで、76年の成立ですが、実質的には75年の4月17日からポル・ポト政権と言える恐怖時代に入ってしまったのです。だから、ベトナムと国境を接しながら、カンボジアは地獄のような事態になっていきます。タイは幸いにして、アメリカ軍の基地はたくさんありましたけれども、戦闘には巻き込まれませんでした。ラオスはラオス戦争があったとはアメリカは言いませんが、ラオスへ行くと実はアメリカとの戦争が色濃くあったことが分かります。今でも不発弾がたくさん残っています。それで今でも死傷者も大勢います。

アジアというのは、ベトナム、ラオス、カンボジアだけではなくて、周辺にある国々やオセアニアのニューギニアも少し混ぜました。主に笑顔を中心に構成しました。話は重いので写真は少し明るいほうがいいかなと思ったのです。

ではスライドを始めます。タイトルは「アジアに生きる」。この一枚目の写真はバングラデシュです。最近では元気が出てきた国ですが、かつては援助で潤ってる国といった悪口を言われてました。そこのスラムです。お母さんに体を洗ってもらっている子どもです。スラムというと日本では汚い、貧しい、怖い、その代名詞みたいな場所となっていますけれども、こうやってきちんと体を洗ってもらう習慣があります。

これもバングラデシュのスラムの少女です。男の子みたいにランニングシャツを着てます。いい笑顔ですよ。私は、こういう笑顔ができるというのはなぜだろうってとても考えさせられるんです。つくった笑顔ではない。やっぱりこういう笑顔ができる日常が、心の豊かさが、あるからではないかと思うんです。

これはネパールです。後ろが棚田になっていて、写真の少女の両親たちはそこで小作農。彼女は小学校3年生までしか学校に行けなかったのもしお金ができたならまた学校に行きたいと言っていました。

サリーはすてきな民族衣装で、日本の着物もすてきですけど。これは木綿のサリーで、ふだん着です。

スリランカの女性ですが、決して美人とはいえない。でもいい笑顔ですよ。こういう笑顔にいつも慰められて、旅をしています。

これは飼われている象で材木などを運んだりしています。

マレーシアのくったくのない表情の子どもたち。こうした子どもは日本にもいたのにいつの間

にかいなくなりましたね。笑顔を取り戻す日本になってほしいですね。

これはマレーシアの右が漁夫で、左が仲買人です。会話が聞こえてきそうでしょう。漁師が真剣な顔で目盛り1つをみつめていますね。

タイの小数民族リス族のお母さんです。着てる民族衣装はふだん着です。みんなとても丁寧な手づくりです。

韓国のソウルの写真です。坂の下から見て上のほうで井戸端会議をしていると思って近づいてみると、実はこの坊やから見るとお母さん、おばあさん、ひいおばあさんなんです。同じ家に同居してるそうなんですよ。

4世代の嫁、しゅうとの問題ないですかと聞いたら、3人が口そろえて、それはありますよと言ったんですね。どこにでもあるんですね。

これはパプアニューギニアです。パプアニューギニアの女性たちは畑で収穫の作業をし、男の人たちは開墾するという分業になっています。この子どもがおっばいをねだってますが、お母さんは子どもが3歳ぐらいになるまでいつもこんな感じで甘やかします。1人のお母さんが育てる子どもは3人ぐらいが普通で、インドのように9人、10人というのは考えられないと言います。一夫多妻ですから1人のお父さんには9人、10人いるんですけど、お母さんには3人ぐらい。どうしてかと聞いたら、そりゃそうでしょう、自然が壊れるでしょうと言うんですね、この言葉に私は圧倒されました。元々は自然をととても大事にして生きている人たちです。

この写真はマニラの住宅街で野菜を売っている少女です。同じような姿は日本でも多かったですね。

次の写真、イランの首都テヘランにある市場の円天井からさしている光の下に少女が立っていました。彼女が向いている方に、店があり父親がいるんです。その瞬間ですが、後ろからたまたまですが、真っ黒づくめの女性が歩いてきてますが、私は実はこういう格好をしてました。イランというのはイスラム教の厳しい国です。つむじがちょっと見ただけでむち打ち刑100回です。履いてる靴下も肌が見えたらむち打ち刑。着てるコートのような上着のヘジャブも膝が見えたらいけないのです。だから女性が大人になったらこのような格好をして外を歩かなければいけない。でも子どものうちは自由ということです。この少女は、今からお祭りにでも行くのですかと聞いたら、そうじゃなくて娘と外を歩くときはいつも自分の家計が許す限りいい服を着せて一緒に歩くんだと、やがて後ろの人のようになるということでした。

この女性はアフガニスタンの女性です。何歳ぐらいだと思いますか。

○会場 20歳。

○大石 いろんな声が上がりました。私はこの少女に始めて会ったのは、彼女がかまどのところで何か火をおこしている後ろ姿だったんです。その姿を見たときにおばあさんがいるなど。私の足音に気がついて彼女がひゅっと立ち上がったんです。そしたら、おばあさんではなかったんですね。で、彼女の写真を撮り始めて、年は幾つですかと聞きました。会場から15歳と言った人が

いましたけれど、私はこの少女を見たときに23とか24歳、子どもがいて、戦争で夫を失った未亡人で生活が苦しくて、生活苦がにじみ出てるような、そういう人だと思ったら、彼女は13歳と言ったんです。私は写真を撮りながら訊いてるわけですけど、13と確かに彼女は言ったけれど、私の頭は理解しない。で、もう一度何歳ですかと訊いた、また13歳と言った。私はカメラから顔を離して、本当は幾つですかともう一度聞いたら、また13と言ったんですね。私は耳と頭がばらばらになった感覚を短い時間の中で感じましたけど、彼女は13歳でした。カンボジアの、ポル・ポト時代の直後も、十五、六歳かと思った子どもが10歳だったりするということがありました。少女のお父さんは戦死して、本当に生活が苦しいようでした。

この人の手に持っているのは義足です。足につけてるのも義足です。アフガニスタン、実は1979年から89年までソ連との戦争でした。ソ連はアフガニスタンにお手伝いに行くと言って戦争をしました。私がソ連に行ったときアフガン帰還兵を大勢取材しましたが、彼らはお手伝いに行くと思って現地に行ったら、とんでもないひどい戦争をしてしまったと言っていました。そのお手伝いをされた結果、彼の足は失なわれた。彼はこうしてバスを乗り継いで遠い遠いところから首都カブールまで1週間かかって、義足を新しく作り直してもらうためにやってきました。偶然道ですれ違いました。

カンボジアです。12世紀につくられたアンコール・ワットです。アンコール・ワットというのはインドの須弥山を模して造られました。

ポル・ポト時代に大勢が殺されました。何人殺されたかが最初に発表されたのは300万人、その次発表されたのが200万人、今150万人以上という数字です。数字は政治的な意味合いもあります。とにかく大量の人たちが殺されました。ここにいる女性たちは未亡人です。彼らの夫が殺された理由は男だから、です。ほかに理由はありませんと言っていました。今は地雷原になりました。兵隊だけではなく農民も女性も子どもも、大勢がこの地雷で命ばかりか足や手を失ってます。今は平和が戻っていますが、ポル・ポト時代は夫婦別居、親子別居、強制労働、食事はナチス強制収容所みたいにほんのちょっとだけという4年間でしたが、今は当たり前の国となりました。この写真の夫婦もポル・ポト時代、別々のところに収容されていました。解放後、夫婦は再開できたということです。

ベトナムです。非常に締まった顔をした少女で、大人っぽいですね。中学生です。この少女に会ったのは1981年ですが、ベトナムってどんな国になったのか、戦争を経てどんな国になるのかととっても気になっていただけに、こうした表情の子どもたちに会って、ベトナムは大丈夫だ、未来があるなと思いました。子どもの顔が引き締まって凜としてしかも笑顔があればその国の未来は明るいと私は思ってます。

17度線から南は戦争中は南ベトナム。アメリカ軍によって大量の枯葉剤・ダイオキシンを散布されました。中部高原地域ですが、戦争が終わって10年後に撮影しました。10年たっても木は生えません。ここは昔深いジャングルでした。丘のように見えますけど、高い山です。野生の動

物、ヒョウとか虎とか大蛇とか猿とかが生息していたそうですが、皆やられてしまいました。やられたのは野生動物だけではありません。人間も大勢やられました。どのくらい大勢の人が枯葉剤・ダイオキシンで命を落としたかわからないし、障害になっているかはっきりとはわかりませんが200万人以上という説があります。日本でも有名なベトナムドクちゃんもその被害者です。

この赤ちゃんは生まれたときから皮膚がつくられない状態です。この子は6番目の子だそうです。1番目の子は夫が南に行く前に生まれた子で健常児。でも夫が帰ってきてから生まれた5人は、そのうちの4人は同じような状態で亡くなりました。この子は生きられるかとお母さんは私に真剣に言ってました。母親の悲しく悔しい思いの目を見ると、自分の写真ですが、いつも胸がいっぱいになってしまうんです。こうした子どもたちが実は大勢いる、それが戦争なんですね。結局戦争はドンパチをやっている砲弾の中にだけあるのではなくて、終わってからもう何十年もたっても、まだ戦争は続いている。広島や長崎もそうですね。そのように人々を苦しめるのが戦争、だから戦争は絶対によくないと、勝っても負けてもその一人一人にとっての苦しみは同じなんですね。

実はアメリカ兵もこのようにして苦しんでいます。枯葉剤・ダイオキシンを浴びたアメリカ兵がいます。もちろん人数はベトナム人よりもずっと少ないですけども。

この写真は土砂降りの中、畑から帰る女性とすれ違いました。背筋を伸ばして凍としている女性の姿を見て、何か励まされる思いがありました。この後ろも、また枯葉剤でまだ再生し切れないところの地域です。

ラオスです。この男の子はカブトムシを自分で採ったと言って、私に自慢そうに見せてくれました。

これは不発弾です。クラスター爆弾禁止条約に日本も調印して、自衛隊はクラスター爆弾をつくらなくなりました。アメリカ軍がラオスとの戦争はなかったと言いつつも、このようにたくさんのクラスター爆弾や大きな爆弾を投下して、今でもラオスの人たちは被害に遭っています。

地中に埋まっていたクラスター爆弾。1975年に戦争は終わり、アメリカ軍がいなくなったのは73年、もうはるか昔ですが不発弾はまだ残留していて、これからもあり続けるというのが武器の恐ろしさです。クラスター爆弾は飛行機から投下します。その名のとおり、こういう筒の中に小さいボール状などの小爆弾を詰めて、そして落とす途中で容器が開いてばらばらばらと小爆弾がまき散らされます。その中で一部は爆弾として破裂し、一部は地雷のように不発弾として生き残り、今も爆発したりするわけです。しかも、小爆弾の中にはさらに小さいビー玉のような爆弾が詰めこまれてあって、人を襲うのです。

これは不発弾処理隊が処理しています。クラスター爆弾というのは、回転の数によって爆発が決まってるように設計されているが外見は分からない。だから少し動かしても爆発するか、否か。ですからクラスター爆弾を見つけると、必ず動かさないで爆発処理をするということです。

田んぼの写真です。向こうは餅米の文化で陸稲です。見つけたこの田んぼで爆発させないとな

らない。一か所に集めて処理することができないのがクラスター爆弾です。

この少女はかわいらしい、けれども寂しい表情をしています。左手を見ていただくと指が曲がってしまいました。これはクラスター爆弾が爆発して、彼女だけではなく何人かがけがをした。その中の1人です。破片がたくさん体とか顔に当たったのです。たき火をしていました。地中に不発弾があることを知らないでたき火をして、その熱で不発弾が熱せられて爆発してしまったのですが、こうした事故が相当あるんですね。それが今ラオスの大きな悩みです。

この写真はインドネシア沖地震、スマトラ沖地震と云いますが2004年に起こりました。その大津波で被害を受けたアチェの子どもです。右の男の子は家族全部失って1人だけ助かりました。左の親子は親戚です。彼女たちも家を流されて家族を失ったりして苦しい。けれども、この男の子は親を失ったので親戚をぐるぐると回されているという、とても精神的につらい状態にあります。

ビルマ、今のミャンマーと国名を変えた国の小僧さんたちです。あちらは上座部仏教で、男の子は一生の間に1回はお坊さんになるという習慣があります。

これはメニョというところですよ。今は観光地っぽくなり始めていますが、イギリス植民地時代の乗り物がそのまま住民によって使われています。

これはラングーン、今ヤンゴンと言っていますね。花がとても美しい都です。髪飾りに花をつけたりしています。アジアの写真は一応ここで終わりです。

この後、実は「福島 FUKUSHIMA 土と生きる」というスライドを用意してきました。その前に福島の話をしたと思います。私の一番新しい写真集が「福島 FUKUSHIMA 土と生きる」です。私は長年にわたって今、見ていただいた写真のようなアジアとか、あちこち我が事のように思って、遠いけれどもポーランドのアウシュヴィッツやコソボも、いろんな国々スーダンも、いろいろな国へ行きました。

## FUKUSHIMA 土と生きる

2011年の3.11が起こって、日本というのは大変な国になったと思いました。それまでの取材で、カンボジアが8割方できていました。残りの2割の取材が残っていました。けれどどうしても国外に足が出ない。それぐらい3.11の地震と大津波はひどかったし、3.12の東電福島第一原発の爆発は日本中を変えてしまったと思いました。歴史の年表で、時代の区分が大体斜めの線になって現されていますね。真っすぐになってない。戦国時代から何とか時代とか。斜めになっている理由のようなものを今ひしひしと感じています。3.11がきっかけになって起こった事故の後、日本は恐らく斜めの中に私たちはいるんだらうと思いますね。なぜなら、被災者たちと遠くにいる人たちとに違いというギャップが歴然とあるからなんです。

原発事故も3.11といいます、爆発は12ですが、11の前と後では日本は違います。そして、もう一度何かがあったらもっと違ってします。残念ながら3.11で日本の地盤は変わってしまったようですね。どんなに安倍政権が「安全だ」と言っても、地震学者の主張ではもう日本列島の地盤

が変わってしまったようです。どんなに立派なことや安心感を与えることを為政者が唱えても、現実はまだ変わってしまっただけ。だから、ここから福島は遠いけれど、風向きによっては真つすぐ来るところも何か所かある。風次第という中に私たちは50基も抱え込んでしまっています。3.11より前は、安全神話で日本には事故がないんだと。チェルノブイリがありました、日本では有り得ない、日本は大丈夫ですと言って、みんなそれを信じていた。私はチェルノブイリも行きましたので、もっと真剣に危険だと主張すればよかったのにと、じくじたる思いがありますけれども、私も気持ちの何処かできつと大丈夫だろうと甘んじていました。

このセシウム 137 だけでも、福島のとくに飛び散った量は広島原爆の 140 発以上分にも相当するほどまき散らしました。これが現実です。セシウム 137 というのは半減期が 30 年、ゼロになるのは 100 年です。もちろんゼロにならなくても人間は大丈夫かもしれないけれども、しかし放射性物質の中で生きていかなければならなくなったということだけは確か、これは直ちに健康に影響はありませんと言われたとおり、直ちには何もありません。学者でないのだからわかりませぬけれども、健康に害がないのならばいいのですが、後で、いや、間違いでした、ごめんなさいと言われても困ります。偽政者は無責任ですね。そういうところが放射性物質のとても怖いところで、後で幾ら責任とれと言っても、その人が牢屋に入っても、自分の命と健康とを取り返すことはできません。それが放射能です。核の平和利用が原発ですが、平和利用の原発と言うから恐ろしくないように感じられるけど、兵器になったら核兵器。

原発事故が起こって、福島は放射性物質で汚染されました。学者の中には、低線量の汚染は人間の健康の害には当たらないという人もいます。そして、むしろ体にはいいんだという人もいます。けれども、それは、いや、違いましたと後で言われたら、子どもや孫、これから生まれてくる子どもたちはどうなりますか。人間としてきちんと考えなければいけないと強く思っています。

「土と生きる」というタイトルですが、まずは、福島の人たちの土が汚されたからです。放射性物質で土が汚されました。会社員の家庭の庭の土も汚されたけれども、農家や酪農家の田畑も汚されました。収穫できなくなるということはその人の人生を丸ごと奪ったことになるんです。彼らが補償金をもらってパチンコなんかやっているんだからいい身分じゃないのと、こういう声も聞きます。もらったお金はみんな飲み代に消えちゃっているんだと非難する人もいます。でもそうでしょうか。自分の人生を丸ごと奪われた彼らが小さな仮設住宅で、しかも東北の冬は寒い、もう零下何度です。寒く、夏は暑く、しかも狭いところに入れられ、そのうえ、これまで田畑で生きてきた人たちなのに、毎日、何もすることがない。私が取材した人の何人かが、まるで人間でなくなったみたいだと言ってました。土と生きてきたのに土を奪われたら、もう自分は人間でなくなったみたいだという人は 1 人や 2 人じゃありません。そうした人たちが仮設住宅といった小さな箱の中に入れられました。朝から晩まで本を読んだり瞑想や想像に精神を向かわせることができるでしょうか。いらいらして、あるいは人生を嘆いて、パチンコにも行くでしょう、飲んだりもするでしょう。そんなことを一々遠いところにいる人たちが何だ、やつらはと言えますか

と私は思うんです。だから、いいじゃない、パチンコに行ったら。それで気が晴れるならそれしかないねと、私は言います。一人ひとりのストレスの強さ、重さは私たちの想像を絶します。今、福島は自殺者が多いです。被災地、宮城、岩手、そして福島の3県の中で一番多いんです。自死を選んだ人を責めることは決してできないし、あの人は私かもしれないと思っている人も大勢いることも確かです。それが福島の現実です。

放射能の低線量は大丈夫、除染したから大丈夫、もう住めるようになったから早く皆さん戻ってくださいと、こういうふうには国は今の政権は一生懸命言ってます。でも戻れない不安があるから戻らないんですね。ふるさとだから戻りたいに決まっています。土と生きたいに決まっていますが、それができない。人間の原点である土を奪われたから、みんなとても苦しいんです。ふるさとから避難した人は15万人もいるんです、15万人しかじゃないんですね。これは本当にオリンピックどころじゃない実態です。明治神宮の森を伐採して、巨大なオリンピック競技場をつくるようですが、でも浮かれていられるときなんですかと言いたい。歴史の年表の斜めの線があって、苦しんでる人と、意に介してない人たちの落差が余りにも大きくて、この国は本当に将来どうなるんだろうという苛立ちを感じています。

いらいらのついでに言いますと、特定秘密保護法が成立しましたから、体制に批判的な発言をしたり、福島の取材を続けたりしたら、逮捕される可能性があるという不安を抱かせる法案なんですね。これは写真家だけではなくても、いろいろなジャーナリストもそうですけど、一般の中でも、そうでない仕事の人でも、医師もそうなんですね。お医者さんというのは患者の秘密を守る。ところが公務員だと規制がかかって歪んでしまうようです。とても厳しい世の中になっていく現実があります。カメラをぶらぶら提げてまちを歩いていたら、あなた何ですかって言われかねないとも。これはちょっと言い過ぎかもしれないけど、写真はすぐスパイと結びつけられます。私が今皆さんにお目につけた国々のまちでもこうした危険は多いのです。撮影するわけではなく、露出をはかろう、あるいはフレームを確かめようと思ってカメラを構えてのぞいただけでも、もう写されたということになるし、肩から下げてるだけでも撮った、あるいは撮るということにもなるし、スパイと見られかねないカメラは厳しいものになってくることは間違いありません。

子どもたちが若者になって、あるいは今の若者が中年になって、そんなはずじゃなかったと、我々の先輩たちが悪いんだと、私たちが責められても困りますよね。でも、彼らのことはとても心配ですが、若い人、本当におとなしい。きょうも若い人は少ないし。金曜日の原発反対デモ、それから特定秘密保護法反対デモなど、若い人ちらほらです。若い人たちは自分たちの将来をどう考えているのでしょうか。(これが本にまとまるころ、若い人たちの姿があちこちの集会やデモ行進などで見かけるようになってきた。少しずつ変わり始めている。それほど現政権に不安と不満を抱いている人が増えてきたことの現われかと思う。)

「土と生きる」というタイトルは先ほど申し上げましたけれども、それ以外に私たち人間にとって土は原点ですね。マンションに暮らしている人も、都会のアスファルトの上で暮らしている人

にとっても土は原点です。土で育てられた食物を食べて私たちは生きています。それから、土に返るという言葉があります。宗教などによって多少違いますけど、土に戻ります。天に上るとか千の風になってなどありますが、具体的には土に返る。水葬というのもありますが。

福島は今、汚染水が大量に出ています。事故当初から流出しているのですが、隠されてきました。その汚染水をドラム缶のような大きな容器に溜めてます。何万ベクレルという高汚染の水を。その置き場は、もちろん福島第一原発の側です。そこは、もと小鳥の森といわれていた森です。今は森がほとんど消えて、汚染水のドラム缶で埋め尽くされています。

「福島 FUKUSHIMA 土と生きる」の写真を上映します。これは田んぼです。セイタカアワダチソウが生えてしまいました。その後、柳が生えてきます。もう森に返ろうとする状態のまま放置されている田んぼがあちらこちらにあります。

この女性は60ぐらいの人です。家族はばらばらになってしまいました。一生懸命やってきたのにどうしてこんな目に遭わなきゃならないのかねと言って、涙を流していました。畜産農家も打撃を受けました。会津などのように、東京と余り変わらないほとんど汚染されていないところは大丈夫ですが、汚染度の高いところの畜産農家は皆ことごとくこのような状態で、廃業せざるを得ませんでした。ペットを残して行ってしまうというのは最近では改善されてきたそうですが、このときは人間が困っているのにペットどころじゃないだろうと係官に言われたらしいんです。仕方なく、バスで避難するときに置いていったそうなんです。ペットどころじゃなく、牛とか豚とかも残されて、つながれたまま死んでしまったというのももちろんたくさんあります。20キロ圏内には2,000頭の牛がいたんです。それが殺されたり死んだり餓死したりで1,000頭弱になりました。その後生まれたのが200頭、合わせて1,000頭ぐらいです。残ったのが800頭。それ以外のところまで含めると、かなりの数になりそうです。

この写真は6号線を走ってきたダチョウです。大熊町にダチョウ園がありました。そこから地震で柵が壊れて逃げ出したようです。ダチョウに会って、私は一目ぼれしてしまいました。ダチョウの大きな目の、なんと悲しそうなのでしょう。羽は疲れ切っていますね。ダチョウがずっとここにいたわけではありません。実は私、ダチョウに会いたい、ダチョウに会いたいとずっと思っていました。車で農家の方の運転で私は何回か20キロ圏内に行きました。ダチョウに会いたいと思いがらなかなかなか会えなかったのですが、この時、何とダチョウがすごいスピードで私たちの走ってる車に追いついて横に並んで走ったんです。それで車を急停車して、このダチョウと恋をささやくことができました。一緒にどこか行きたかったんですが、結局私は圏外に出ました。このダチョウはどうしたかわかりませんが、後、ダチョウ園に戻されたという話もあります。高村光太郎の詩にダチョウの詩があるんですね。後になってから知りましたが、こんな寒い福島で南国のダチョウはかわいそうな感じがしました。そもそもダチョウは東電が福島に原発を造ったときに飼いはじめました。「少しの餌で大きく育つダチョウのように、少しのウランで大きな電力が得られる原発」がうたい文句だったそうです。

その原因をつくった原発がここから3キロと書いてありますが、ゲートの写真です。左の原子力運送というこの文字を見てください。この原子力運送という名前ですね。原子力というのは核ですけど、時代の最先端の代名詞のような誇りだったのです。だから原子力煎餅とかですね、福島は知りませんが、私が行ったところにはアトムあめとか、お土産品として売ってました。原子力というのはそういうことだったのです。40年以上前、結局私たちは歌って踊ってつくったのが今の54基、今はマイナス福島の4基の50基ですね。

この写真は女子高校生です。彼女は、自分が将来結婚とか出産とか大丈夫かなとすごく心配していると話してました。前は畑でおいさん、おばあさん、お父さん、お母さんも一緒に野菜などをつくってました。こちらのおいさんも言いました。自分は人間じゃなくなったみたいだと、さっき紹介しましたが、そういうことを言ったおいさんの1人です。

川内村の20キロ圏内から少し外側に、先祖代々、江戸時代から住んでいる家族です。本当は戻ってはいけない避難区域でしたが、自分の家は、田んぼは江戸時代からあるのでそれを絶やすことはできないから田んぼを守りたいんだということでした。アイガモ農法で50羽のアイガモを飼って、田んぼに放して稲作をしていました。このときの稲は2トンとれました。その前の年は1トンでした。検査官が来て、測ると、バクレルはぐっと低かった。けれど、廃棄しろ、なぜなら、つくってはいけないところでつくったから、と。まるでソ連みたいですね。もうソ連はなくなりましたが、まるで昔のソ連だと思いましたね。バクレルは出ないのにだめと言われて、結局全部捨てさせられたんです。官庁にとって統制がとれなくなるでしょうね。ソ連時代の末期に行きました農村ではそのような抑圧だったと人びとは口々に話してました。

これは田んぼをつくっても大丈夫な川俣で、収穫が終わった直後の写真です。この手前の箱を持っている子は悠真ちゃんといって2歳7カ月、後ろにいる人はひいおばあちゃん。背負われているのは妹の葵ちゃん。箱に入っているのを私に見せたくて、彼は道の向こうから走ってきて、とれたよ、とれたよ、と。何をとったのかと思ったら、見えないですけど小さいサワガニが1匹入ってました。彼は喜んで、もうご自慢の顔です。

桜です。福島県というのは日本で一、二を争う桜の多いところで、山あり谷あり平野ありなので、春になるとどこでも何らかの種類の桜が咲いているそうです。山桜とか八重桜とかいろいろありますね。その桜がどこへ行ってもある。しだれ桜の下で屋根を直してる男性がいますが、まだ地震の跡が癒えてないということも言いたくてこの写真を選びました。あちらこちらの桜を見ながら、先ほどのミャンマーの写真で花飾りをした人びとも重なりますが、福島の人々は花が大好きなんです、大事にしていますね。ということは自然を大事にしているということでしょう。福島の人たちからとても沢山のことを教えられました。(スライドは以上です)

○清田 さっきスライドの中で、ベトナムの中学生の少女がとても、何ていうか気品を感じた少女、凜とした少女の姿がありましたけども、大石さんも多分お年ごろのころはあんな少女だったんだろうなというふうに思いながら拝見してました。せっかくの機会ですのでできるだけ、こ

れだけは聞いておきたいとか、どうですか。

前の方、はい、どうぞ。

○会場 どうもありがとうございました。

半世紀近くにわたって、写真を通じて戦争の悲惨さを訴えてこられた先生に深く敬意を表したいと思います。そうした先生だからこそ1点お伺いしたいんですけども、現在の我が国の政権というのは、集団的自衛権の名のもとに紛争国へ積極的に自衛隊を派遣して、戦争のできる国、それはアメリカに加担するということなんでしょうけど、戦争のできる国にしようと、それが積極的平和主義だというような言い方をしているようでございますけれども、私自身はやはりそれには到底賛同できないということで、従来どおり専守防衛に徹するべきだというふうに考えておりますけれども、先生のご意見をお伺いしたいと思います。よろしく願いいたします。

○大石 ありがとうございます。

おっしゃるとおりだと私は思っています。とても今怖いですね。そういうご質問が出たから、齒に衣を着せないで言いますけれど、今の政権は戦争時代という意味で後ろを向いているということをととても強く感じていますし、さっきもちょっと言いましたが、今の子どもやこれから生まれてくる子どもたちもとても大変になる時代になってくるんじゃないかと、何よりも今の若い人たちは、戦場に行かなければならないという事態になる。ということは、日本が戦争をする国になっていくんじゃないかと思っています。だから、これは絶対に許してはいけないと思いますが、戦争というのは、日本も含めて様々な国を見ていて思うのは、戦争をしたい人はひと握りなんです、最初は。それでヒトラーもそうかもしれないですけど、最初のひと握りがだんだん膨れ上がって、大きくなったときには、個人が反対できない力を持ってしまっている。かつて日本もそうでしたが、牢屋に入れられたり処刑されたりということになってしまう。なってからでは遅い、なったらあとは戦うしないというふうに言わざるを得ないぐらいのものが戦争。だからそこへ行く前に何とか、止めなければならぬと思っています。

この間、沖縄で名護市長選がありました。あのときに4,000票の差というのは大きい小さいかわかりませんが、辺野古埋め立てを反対する市長が勝ったわけです。その選挙の前に知事を招いて多額のいろんなものをご存じのとおりのことをして、あげくの果てに石破さんが行って500億円の支援をするよと見せびらかしていましたが、あのお金は私たちのお金ですよと言いたい。あれを何で彼が勝手にそんなあげるなんていうのと、しかも自民党が負けたらあげない。これは沖縄の人をばかにしてる話で、沖縄の人だからそれが通用すると首脳陣たちは思ってるかもしれないけれど、しかしよく考えてみるとこれが私たちの政権なんですね。代表者で、それが総理大臣なんですね。今は天皇よりも強いのが総理大臣ですから、日本の代表は総理大臣なのに、大統領はいないですから、だからその総理大臣がそんなに国民をばかにして、これがこのまま何年も続くと、日本はとんでもない国になると思います。こういうことを言うと私は牢屋に入れられる時代が来るかもしれないですけども、でも本当に心配しています。真面目に他人事でなく

我が事として心配して関わなければならないときに来ていると思うんですね。

このままだと事態は悪化でしょうね。安保のときとか、いろいろと日本が岐路に立って大変だと思ったことありましたが、今回が一番怖いと私は思っていますね。そうした事態にあるにもかかわらず、若い人たちはどうしたんでしょうかという感じです。若い人が動かないから国は変わらない面が大きいのではないかしら。やっぱりショッピング・セールでも、若い人向けにするじゃないですか。老人向けはめったにないのと同じで、若い人が動かないとだめです。皆さんの周りのお子さんやお孫さん、若い人たちを真面目に説得していただきたいです。

○会場 ありがとうございます。

素朴な質問なんですけれども、写真でカラーでないのはどうしてでしょうか。

○大石 カラーもアジアのほうにはありましたよね。テーマによってカラーと白黒を使い分けてます。アウシュヴィッツもモノクロームでした。福島をモノクロにしたのは、この写真集は日本人の人们に見てもらいたいと思ったのが大きな理由です。お話ししてきたような思いで福島のことを見ていただきたい、知っていただきたい。福島の一人一人に自分を重ねて、自分だと思って写ってる人と対話してもらいたいという強い願いでこの1冊をつくりましたので、色は日本人でお互いに色を知っていますから、色は要らないと思ったのが1つあります。やはりアジアを色で撮っているのは色を見てもらいたい。アジアの色、空の色、花の色、衣裳……と、色で知っていただきたいという思いが強くあります。ですから、これからもきっとカラーで撮り続けるでしょうけれど、福島は色でなく、もっと端的に福島の人たちの心の中を知ってほしいし、一人ひとりと対話してもらいたいという思いでモノクロームにしました。

○司会 どうもありがとうございます。次回は3月15日ですので、またよろしく願いいたします。本日はありがとうございました。

本稿は2013年度帝塚山学院大学・(財)大阪狭山市文化振興事業団主催国際理解公開講座(後期)「日本人女性の自立を考える ～ウーマノミクスの足元～」における講演をまとめたものである。